ランクス大将の座右の銘は孫子の「彼を知り己を知れば百戦危うからず」であると産経新聞に書いてありましたけれども、要するにこれは洋の東西を問わない兵法の真理なわけです。栗林も八原も敵についても味方についても非常によく知る得る経験を持っていましたし、それからその知識を生かせる頭脳を持っていたと思います。

八原という人は戦後になって色々文章を書いていますが、頭のいい人だなと思わせるような文章です。

そういう彼らであるからこそあれだけの戦が出来た。しかし彼らの活躍というのはいうまでもなく余りにも遅すぎた。知は力なりと言いますが、知識というものを力として活用しない、それどころか知っている者が排斥される風潮が、戦前、戦中の日本を支配していたのです。

アメリカの力の現実を知らずに、アメリカ何するものぞというふうな勇ましい事を言う日本人が国を誤ったということは否定できないと思います。

今後そういう失敗を繰り返さない為にも、知を力たらしめることがいかに大事であるか、それを日本文化の中に根付かせる努力をすることが、栗林中将の死を無駄にしない最大の所以であろうというふうに、彼の生涯を振り返って私は考えておりますし、また栗林中将論を書いた最大の目的もそこにあります。

栗林中将の奇跡的な統率

これから少し具体的に栗林中将の人となりと、硫黄島戦から我々はどんな教訓を汲み取るべきなのかというふうなことについて、私の思うところをお話していきたいと思います。

硫黄島にアメリカ軍が上陸を開始する九カ月前、昭和十九年の六月に栗林中将は小笠原兵団長として硫黄島に着任します。その際まず兵団司令部の位置を決定するわけですが、その決定の仕方がいかにも栗林らしい。

当初、軍中央は司令部を小笠原諸島の父島に置くように提案します。父島というのは小笠原の政治経済の中心地でありますし、すでに父島要塞司令部も置かれていた。司令部活動に不可欠の通信の中枢でもあったということで、軍中央の提案はいわば常識的な提案だったわけですが、栗林中将は硫黄島に直接兵団司令部を置くといって、それを退けました。アメリカは飛行場が欲しいんだから必ず硫黄島にやって来る。小笠原防衛の最前線である硫黄島に出なければ、本当の意味での指揮は出来ない、そういう覚悟で硫黄島に進出したわけであります。

生き残った部下の一人が、最初の中将の決断に彼の統率の性格が象徴的に現れていると書いています。どんな時でも栗林中将という人は部下と苦楽を共にする指揮官で、のうのうと父島にいて硫黄島の戦闘を指揮するなどということを、最初から考えなかった。いかに通信が発達したとはいえ、父島で考える硫黄島は、「群盲の象に触るに似ている」、やはり指揮官たる者は部下の目に触れる第一線で部下と共に行動してこそ本当に効果的な指揮も取れる、そういう判断で栗林中将は硫黄島進出決断したのだというのですが、その通りだと思います。

栗林が部下と苦楽を共にする指揮官であったということについては沢山の逸話が残されております。日本兵は千人ぐらい捕虜になって生き残っていますが、その捕虜たちが皆口を揃えて栗林中将のことを感激を持って振り返っているので驚いたと、敵の大将スミスが言っています。硫黄島というのは至る所硫黄が吹き出す地熱の非常に高い所で、そこに地下濠を掘って日本兵は持久作戦を戦ったわけですが、地下を掘る苦労というのは並大抵の事じゃなかった。そういうところで本当に鬼じゃなければ言えないような命令を下して、地下を掘らせたにもかかわらず、兵隊達は口を揃えて栗林中将を感激を持って振り返っている。この中将はどういう人間なんだというふうにスミスは思ったということです。

そういう指揮官だったわけです。彼の逸話についてはご存じの方も多いと思いますけれども、やはり栗林中将という人の偉さを考えると省くわけにはいきませんので、簡単に代表的な例をいくつかご紹介したいと思います。

硫黄島というのは川が一本もありません。天然の水というのが全然無い。今でもそうです。何年か前に硫黄島に行きました時に、航空自衛隊の方が一緒に付いて来て下さったんですが、ペットボトルを持っていた。そして慰霊碑のところに先ず最初に水を掛けます。水が無くてどれだけ苦労したかということなんですが、日本軍がやって来る前に、島民は千人程居た。その千人程しか居なかった時でも、水は大変な貴重品でしたが、そこに二万一千の日本軍がやって来たわけですから、水が足りる筈は無く、水不足には本当に苦しんだ。水が無い状態で地熱の高い地下を掘るわけですから、これはもう地獄の苦しみだったわけです。

そういうわけで硫黄島に内地から幕僚が連絡の為に来島することがあったりすると、師団長への土産として一升瓶に詰めた内地の水を必ず持参したそうです。すると栗林中将は各部隊長を司令部に呼んで、たとえコップ一杯づつでも皆に分配したといいます。そして彼は率先して節水に努め、これは有名な話ですけれども、毎日茶飲み茶碗一杯の水で髭を剃り、顔を洗い、残った水を手洗い用に使ったというのです。部下の参謀が書いていますけれども、

こういう鉄石の態度は兵団長独特のもので、誰も真似が出来なかったそうです。

ですからこの貴重な水を兵隊が無駄使いしていると、栗林中将は顔面を紅潮させて激怒したと言います。「水の一滴は血の一滴と心得ろという師団長命令を知らないか。お前が今使った水は、いざという時に何十人の命を助けると思うか」と言って兵隊を叱責して厳しい処罰も辞さなかった。

水だけじゃなくて食料不足も大変深刻で、生野菜なんかは全くありませんから、栄養失調患者が続出しております。栗林中将もやせ細って「インドのガンジーのようになりました」と奥さんに手紙を書いています。ある時作戦打合せの為に大本営の陸軍部の少佐が茄子とか胡瓜とかを籠に入れてお土産に硫黄島にやって来たことがあった。そしたら栗林中将は、僅か一籠の茄子や胡瓜を副官に命じて何百もの小さなかけらに切り刻ませ、司令部の周辺に居合わせた兵隊達に一片づつ分けてやった。「貴重な本土の生野菜だぞ」と言って皆に分けてやったというんですが、その一かけらも自らは口にしなかったとこの少佐は書いています。

もう一つ、栗林中将の統率を如実に物語るといいますか、そういう象徴的な事実があります。先程言いましたように生き残った将兵一千人は、栗林中将を感激を持って振りかえるわけですが、皆口を揃えて言うのは「自分は戦場で栗林中将に会った、しかも一度だけじゃない、何回か会っている」と言っているというんです。しかも単に顔を見たというだけではなくて、「ご苦労」と声を掛けられたとか、恩賜の煙草を貰ったとか、歩兵、砲兵、通信兵、海軍兵、その兵種を問わず皆そのように感激を持って中将の面影を懐かしんでいるのです。

阿部という中隊長の文章が残っているのですが、この人もやっぱりそうで、阿部中隊長が陣地構築を作業していると部下が「年取った将校さんがさっきからこっちを見ていますよ」と言うので振り返って見ると、顔を見たことのある師団長その人だった。驚いて作業を中止して笑顔でこちらを見ている栗林中将の所へ行って、新しい陣地を構築作業中であると報告したそうです。その時のことについて阿部が書いている文章を読んでみます。「栗林中将は私をタコの木（タコの木というのは硫黄島によく生えている亜熱帯の樹木です）の陰に誘ってまず煙草を差し出し火も付けてくれた。こんな経験は始めてである。大隊長までならいつも顔を合わせて何でも言えるが師団長ともなると顔を見ることも殆どない。それが親しげに煙草を出し火を付けてくれるなんて普通考えられないことである。作業ズボンは汗と土まみれで上半身は裸。そんな自分に師団長は『お前は中隊長かご苦労だな』と言われた。それから自分が兵士達の健康状態、陣地の状況など詳しく説明した後、師団長は一つ一つの陣地を熱心に見て回られて指導された。その後いく度か私の陣地に足を止められ、煙草に不自由しているだろうと何本かいただいたことを思い出す。米軍が上陸した場合は本土からの救援が無く、玉砕戦闘となることを承知で硫黄島に最高責任者として着任され、深く部下に思いを致して炎天下陣地を回られた心情が痛いほど胸にこみ上げて来るのである。」

これは例外的な証言ではなく、生き残った将兵が口を揃えてそういうたぐいのことを言っているわけです。そういうことを考えますと、栗林中将は二万あまりの守備隊の将兵全員と一度ならず口をきいた可能性があることになる。彼が島にいた日数は二百日程度ですから、単純な割算をすると五十三才の兵団長が一日平均二百人以上の部下に声を掛けている計算になる。実際栗林という人は毎日朝早くからずっと島中を歩き回っていますね。島の地形とか陣地構築状況とか隅から隅まで毎日、毎日チェックして歩いている。だから硫黄島について栗林中将以上に知っている将校は誰もいなかったと言われるぐらいに丹念に見て回ってますから、その過程で彼は声を掛けるということをやっていたんだと思います。

こういう栗林中将の統率について、陸上自衛隊で大隊長の経験のある自衛官が書いている事ですが、自分の指揮官としての経験から判断して「奇跡」と言いたい程の強烈な統率だと言っています。

栗林という人が偉いと思うのは、こういう強烈な統率をする彼が、同時に非常に繊細な文人肌の将軍でありまして、愛妻家で子煩悩で実に家族思いのやさしい面を持っていた。また兵隊達と本当に全然変わらないような人間的な弱さというものを持っていて、それを自覚してそういうものと戦っていた人だということが調べていくとよく判るんです。

今日ここに持ってきたんですが、最近小学館から出た『玉砕総指揮官の絵手紙』という本です。アメリカ留学時代から硫黄島戦の頃まで栗林中将が家族にせっせと書き送った手紙を集めたものです。これをお読みいただくと、単に豪気なだけではない、中将の色々な側面がお判りになると思います。

帝国陸軍の致命的弱点

栗林中将の帝国陸軍の軍人としての特質について考えますと、彼は欧米列強のどこの国に行っても一流の軍人として立派に通用しただろうなと、今の

イチローとか松井みたいなもので、どこに行ってもちゃんとやれた人だなという感じがします。逆にやや極端に言いますと、そういう栗林中将の優れた特質を裏返しにすると、それがそのまま帝国陸軍の弱点になるというふうな感じがします。次にその弱点についてお話をしたいと思います。

これでは負けたのもしかたがないなと思わせるような弱点であります。ただ誤解がないように前もって申し上げておきますが、敗戦後陸軍を悪しざまに言う傾向があってそれは今も続いていると思いますが、私は陸軍の弱点は陸軍に限ることではないし、海軍だって同じだし、というよりも何よりも本質的に日本文化の弱点であったというふうに思っています。要するに陸軍だけを悪者にしてすまされるような、そういう簡単な問題じゃない、もっと深刻だというふうに思っています。

ですからかつての失敗を繰り返さない為には、我々自身の弱点を妥協することなく直視する、つまり己を知るというのが何より大事だろうと思います。別に外国人に対して日本人の悪口を言うのではなく、日本人同士で己を知る努力を真剣になすべきだろうということです。身内で遠慮をする必要はない。それにこのところ仲間褒めと言いますか、日本人を美化する論調もいろいろ出ていますけれども、仲間内で褒め合っても仕方がないし、第一みっともないと思います。仲間内はむしろ厳しくやるべきであります。

アメリカの凄さについてもお話したいと思いますけれども、それは別にアメリカ礼賛のつもりではございません。ちょっと口はばったい言い方かもしれませんけれども、己については厳しく考えることが己の向上に繋がるし、他国についてはその長所を取り入れるべく努めることが、己の向上に繋がる所以だろうと思います。そういう意味でアメリカを知る努力というのは非常に大事なことだと思います。日本文化の弱点なんてことをいいますと、こいつも自虐史観の手合いかというふうに誤解されることが多いものですから、まず一言お断りします。

で、これから陸軍の弱点と私が思っている点について、大きいものを二つお話したいと思います。

主観的性格

一つは、その極めて主観的な性格であります。「主観的」というのは昭和天皇が陸軍大臣板垣征四郎大将を批判した言葉で、「陸軍にはすべてを主観的に見る伝統があるのではないか」と言って、板垣大臣を叱責されたことがあったというのです。まさに帝国陸軍は、彼を知り己を知りの、彼を知るという重要な努力が極めて希薄で、日本的な主観に閉じこもってしまい、外の客観的現実を見ようとしなかった。陸軍の戦争指導が「盲目の戦争指導」などと言われる所以であります。それゆえ、敵性語と言って外国の言葉を学ばせない。外国の言葉を学ばないで外国の現実の何が判るかということになるわけですが、そういう愚劣なことをやった。ただ、今回いろいろ調べて驚いたのは、帝国陸軍に優秀な知米派がいなかったわけではないということです。

いました。栗林中将以外にもいました。例えば東条首相と親友だったらしいですが、渡久雄という人もそうですし、寺本熊市という人もそうです。何れも栗林中将の先輩でワシントンの日本大使館の武官をやっている人達ですけれども、そういう渡とか寺本とかいう優れた知米派がいて、アメリカの現実をちゃんと紹介する立派な業績も残しておりますし、それは公表もされていたのですが、それが全然と言っていいほど活かされなかった。

戦前、戦中に、これもやはりアメリカという国をよく知っていて、この国とだけは戦争をするなと言って、文章を発表することを禁じられてしまったリベラル派知識人で清沢洌という人がいますけれども、彼はその時の思いを日記に綴っています。それが戦後『暗黒日記』と題して岩波文庫から出ていますが、あれを見るとどういうふうにして口を封じられたのかということがよく判るわけです。清沢洌は「知らない者が知っている者を排斥する風潮」、そういう忌まわしい風潮が日本を覆っていたというふうに言っています。

例えば『暗黒日記』にこんなことを書いています。昭和十八年五月二日付けですが、「敵国は日本の事情に通じる者をそれぞれに重要視している。例えばグルーを使ったごときだ」と。グルーというのは知日派のアメリカの外交官です。日本の大使として来たわけですが、日本はアメリカを知るものをさっぱり使わず、むしろ遠ざけしまった。昭和十八年七月十四日付けの日記にはこう書いています。「物を知らぬ者が物を知っている者を嘲笑、軽視するところに必ず誤算が起きる。大東亜戦争前にその辺の専門家は相談されなかったのみでなく、一切口を封じ込められた」。

文筆家や外交官に対してだけそういうことがあったわけではなくて、陸軍内部の知米派に対してもその種の排斥がなされました。例えばインパール作戦に加わってビルマで亡くなった山内正文という中将がおりますが、この人はアメリカの陸大をトップで卒業したという大変優秀な知米派だったわけです。ところが知米派としての見識がかえって彼の身に仇をなした。秦邦彦氏が『昭和史の軍人達』という本に書いていることですけれども、こんなことを言っています。対米戦を軽々しく決めたのは陸軍内部に知米派が無かったからだという向きがあるけれども、開戦前の陸軍人事をよく調べてみると、ま

ず知米派を要職から追い出す過程が先行している。

山内正文中将のことがそうで、彼は昭和十三年ワシントン大使館付き武官で赴任すると、アメリカの戦力を軽視するなという警告をたびたび東京に送り、日独伊三国同盟を推進していた軍中央のタカ派に嫌われた。そうしてこれが傑作なんですが、山内の「対米理解は国策に合わない」ということになって在任一年半で更迭されて、二度と中央の要職には戻れなかったというのです。誰それの「対米理解は国策に合わない」という発想ですが、要するに客観的現実よりも主観的理解の方が大事だということなので、正に全てを主観的に見る伝統を持つ国ならではの言い草でありましょう。

栗林中将の場合も知米派としての見識が重用された形跡が殆どありません。アメリカから帰国後所謂省部の中枢というところの指導的な立場に身を置いたことは一度もない。山内中将がワシントンからアメリカの戦力を軽視するなという警告を発していた頃、昭和十三年ですが、栗林中将は何をやっていたかというと馬政課長という軍馬を扱う箇所の責任者でした。彼はその時にある論文を書いています。「新馬政計画の樹立に付いて」という論文ですが、冒頭、「近代戦闘が科学一色に塗りつぶされ、軍機械化の風潮とうとうとして人皆飛行機を語り、戦車、自動車を論ずるの際、ここに昔ながらの馬を談ずるは些か時世遅れの感なきをえないが」というふうにまず断って、馬政計画について書いている。

彼はアメリカで近代戦闘について勉強してきたに違いないわけです。アメリカ中車で走り回っているし、テキサスの騎兵学校かなんかにも入っていますし、アメリカから戻って来る時にはヨーロッパをずーっと視察していますから、近代戦闘というものはどういうものか、第一次世界大戦の後どういうふうになったのかということについてよく知っていた筈なのです。ですから後に初代機甲部隊長に任じられますけれども、その彼が昭和十三年に馬政課長をやっていた。近代戦闘の本場アメリカで学んだ知識を生かす職場とは到底言い難いわけであります。

それだけではなくて、アメリカとの戦闘が始まってからも陸軍指導部は主観的性格を改めなかった。アメリカの客観的現実というのを本気で知ろうとはしなかった。沖縄戦の八原参謀について書いた本で、稲垣武氏が「信じられない話」だといって紹介しているエピソードがあります。陸軍大学校の戦術教育は昭和十八年末まで対ソ戦一点張りで、戦術教育に使われる地図も満州の地図だった。それが対米戦術に転換したのは昭和十八年十一月三〇日、陸大五十七期生の卒業式に昭和天皇が臨まれた時、天覧の図上戦術が対ソ戦を対象にしたものであることにびっくりされて、帰途侍従武官に「陸大はまだ対ソ戦をやっているのか」、「あれで大丈夫なのか」と言われたというのです。それがきっかけとなって陸大の戦術教育が変わった。しかし、昭和十八年末というと戦争が始まって二年ぐらいたっているわけです。ミッドウェイでも負けていますし、ガダルカナルももう落ちている。山本五十六も死んでいる。アッツ島も玉砕している。つまり日米の好守逆転を示す兆候がすでにはっきりと現れている頃ですが、そういう時期になっても、天皇にこのようなことを言われなければ陸大は戦術教育を転換しようとしなかったということです。凄まじいというか、正に信じられないような話です。

もう一つ信じられない経験というのを書いているのが、山本七平で、彼も帝国陸軍の軍人だったわけですが、あるエピソードを紹介しています。

やはり昭和十八年の夏に山本は陸軍予備士官学校で幹部教育を受けていた。ある日、区隊長が教壇から改まった口調で言った。「本日より教育が変わる。対米戦闘が主体となる」。そして区隊長はその後いとも正直に付け加えたというのです。「新しい教育はア号教育と呼ばれるが、何をどう教えたらよいのか実はさっぱり判らない」。正直は正直なんですが、「戦争を始めて二年近くもたってようやく当の敵国を対象とする戦術教育を開始することにしたものの、資料も何もないから何を教えてよいか判らないと、そんな阿呆な話というのは世界各国のどんな文献を調べても出てこない。一体どうしてこれほど現実性が無視できるんだ」と山本七平は書いています。

けれども、信じられない程の、阿呆なまでの現実無視、すなわち彼を知る努力を怠るリアリズムの欠如といいますか、そういうところに帝国陸軍だけではなく、我々の文化の弱点というものが如実に示されていると私は思います。

栗林中将が硫黄島の北の端の「北の鼻」というところ(私も見てきましたけれども、本当に岩山が多くて断崖絶壁になっているようなところで、守るによくて、攻めるに難いところに最後の拠点を作って米軍を待ち受けることを栗林中将がやったわけですが)、その北の鼻という最後の拠点に追い詰められた頃、昭和二十年の三月七日、栗林中将は大本営の参謀次長に最後の戦訓といわれるものを打電しています。因みに私は自衛隊の友人に、栗林中将の戦訓はどれぐらい残っているんだろうか、防大とか防衛研究所とかにないんだろうかと訊いたら、無いでしょうねと言われました。幾つか公表されている、或は活字になっている栗林の戦訓はあるのですが、本当に残っていないですね。しかし、残っているのを見るとやはりこの人の個性がよく現れていて面白い。

三月七日の最後の戦訓の中にこういう言葉があります。

「防御上更ニ致命的ナリシハ彼我物量ノ差、懸絶シアリシ事ニシテ結局戦術モ対策モ施ス余地ナカリシコトナリ」。そういう悲痛な文言が含まれている戦訓ですが、その二日前にも栗林は戦訓を打電しておりまして、やはりアメリカの物量と合理的戦法の凄まじさの前になす術を失った苦衷を訴えております。

「本島防衛ニ當タリ致命的打撃ヲ蒙リシハ、海空ヨリノ攻撃ニシテ挙大ノ本島ニ対シ戦艦二、重巡五、輕巡一〇、驅逐艦約四〇、計約六〇隻、四〇〇餘門ヲ以テスル砲撃ノイカニ熾烈ナルカハ想像ニ餘リアリ」とはじまる文です。

皆さんの場合には私なんかよりもプロですから説明の必要はないのでしょうが、学生にこういうのを読む時に、重巡て何だ、輕巡て何だ、駆逐艦て何だといちいち説明しなければいけないわけです。ここは経済界の方が多いのでしょうからぜひ申し上げたいのですが、ワープロで軍事関係の言葉って本当に出てこないですね。何が出てくるかというと金儲けのことばかり。要するに商売、経済そればっかりなんですね。これも象徴的な事実だろうと思います。先程今の若い連中が硫黄島戦も何も知らないといいましたが、それは何かこういうふうな事と根底で結びついている現象なのではなかろうか、軍事アレルギーというのは未だに解けてないですね。そういうことを色々考えさせられる現象なんですが、ともかくこういう想像に余りある熾烈なる攻撃の状況を報告しています。続けて読みます。

「コトニ観測機ノ機敏的確ナル誘導ニヨリ、要部、要點ニ猛射ヲ加ヘ、夜間ニ及ブモコレヲ繼續セルハ甚ダシク苦痛トセシ所ナリ。

今日マデノ發射彈數ハ約三〇萬發ト推定セラレ水際陣地、主陣地ヲ初メ陣地施設ハ主トシテコレニヨリ潰滅ス。」

栗林中将は水際戦法を捨てたのですが、それでも海軍部隊なんかがトーチカをずいぶん作っていましたから、水際にもある程度兵力は配置していました。しかし、これは艦砲射撃か何かでやられるとひとたまりもない。私は硫黄島に行った時にびっくりしたんですが、崖の縁に、破壊されたトーチカの巨大なコンクリートのかたまりが本当に転がり落ちるような格好で乗っかっているんですね。艦砲射撃で吹っ飛ばされて崖の上にそのまま乗っかっているわけです。水際陣地なんて作っていても何の役にも立たなかったでしょう。陸軍のそれまでの戦法は水際で敵を迎えるやり方で、一生懸命水際の陣地を作っていた。それに対して栗林は水際陣地を捨て、従来とはまったく違う地下に潜る戦法を主張したのですが、抵抗する勢力が随分あって、相当苦労して、半年位かけてやっと意思統一をしたという状況だったようです。

続けて読みます。

「敵ノ制空權ハ絶對カツ徹底的ニシテ一日延ベ一、六〇〇機ニ達セシコトアリ。未明ヨリ薄暮マデ實ニ一瞬ノ隙ナク二三〇及至一〇〇餘リノ戦闘機在空シ、執拗ナル機銃掃射力爆撃ヲ加ヘ、ワガ晝間戦闘行動ヲ封殺スルノミナラズ敵ハソノ掩護下ニ不死身ニ近キ戦車ヲ骨幹トシ、配備ノ手薄ナル點ニ傍若無人ニ滲透シ來リ、ワレヲシテ殆ド對策ナカラシメ、カクシテワガ火砲、重火器コトゴトク破壊セラレ、小銃オヨビ手榴彈ヲ以テ絶對有利ナル物量ヲ相手ニ逐次困難ナル戦闘ヲ交ヘザルヲ得ザル状況トナレリ。以上コレマデノ戦訓等ニテハ到底想像モ及バザル戦闘ノ生地獄的ナルヲ以テ、泣キ言ト思ハルルモ顧ミズ敢エテ報告ス。」

私の連載を読んでいてくれた同僚がよく言っていたのですが、栗林という人は本当にいい文章を書いていて、電報とか論文とか見ていても見事なものです。ボキャブラリーも多いし。正に達意の文で生き地獄としての硫黄島の様子を描いています。ここの最後に、「泣キ言ト思ハルルモ」云々とありますが、当時アメリカの実力といいますか、アメリカの客観的現実についてこれをあるがままに語ると、泣き言を言うなと批判される風潮があったものと思われます。

言うならば精神で、気力でカバーしろというようなことが言われたんだろうと思います。しかし、栗林中将は硫黄島に来て初めてアメリカの実力を知ったわけではなくて、ずっと前から知っていて、だからアメリカと戦争したらダメだよといい続けていました。その人がここに来てシャーマン戦車の傍若無人なる迫力に直面する。さぞ、無念だったろうと思います。

この戦訓を栗林は暗い地下濠の中で書き乍ら(私も兵団司令部の地下濠に入ったことがありますけれども)、あそこで何を思っていただろうか。知が力として生かされなかったことへの無念の思い、激しい怒りを押し殺しながらこれを書いていたのではないだろうか。

「泣キ言ト思ワレルモ顧ミズ敢エテ報告ス」というこの一言に、栗林中将のそういう思いが込められていると私は思います。

本分を軽視

帝国陸軍の弱点のもう一つについてですが、軍人が軍人としての本来の任務というものを自覚していなかったんじゃないかというような印象が非常に強い。つまり軍人たるものは何を一番大事に考えるべきなのか、その自覚がどうも列強の軍人などと比べると希薄だったんじゃなかろうかということであります。

一方、栗林中将の指揮ぶりを見ますと、硫黄島戦というのは制海権も制空権も補給線も全部失ったというまこと

に未曾有の戦闘だったわけですが、彼はそういう未曾有の戦闘の中で物量に物を言わせて攻めかかる強大な敵を相手にどうやったらよく戦えるか、その一点にすべてを集中する指揮の仕方をしているわけです。ですから危機感が希薄な兵団首脳、幹部達を更迭することまでやっている。そういう意味での荒療治をやっているのです。そして、第一線で戦う猛者として有名だった軍人を三人硫黄島に呼び寄せて、指揮を取らせています。

ある参謀は、よくも軍中央が三名も同時に陸軍きっての猛者を硫黄島に送り込んだものだと驚いています。そしてこの人事は一部の将兵にかなりショックを与え、兵隊の間でもいろいろな噂が流れたといいます。

しかも更迭した兵団首脳を栗林は島から出さず、司令部付きという形で島に止めていまして、その結果全員戦死しました。そういう非常に厳しいことをやっています。

かのマッカーサーは帝国陸軍について「帝国陸軍の軍人は、戦場における勇戦敢闘などにはかかわりなく長い間の封建的通弊によって昇進していくらしいから、日本の兵隊は極めて強いが軍中央は恐るるに足らない」と言っています。

栗林中将がやったことというのは、いうならばこの日本軍の慣行といいますか、封建的通弊とマッカーサーは言いましたが、これを無視して、どうやってよく戦える軍隊にするかという意味での荒療治をやったわけです。

小笠原兵団というのは当初、いわゆる老兵集団で、非常に弱体だったわけですが、その小笠原兵団を、マッカーサーの言葉で言うならば「恐るるに足る精強なる戦闘集団」たらしめるべく、栗林は必死の努力をしたのです。その過程で危機感の希薄な兵団首脳の首を切る、猛者を送り込んで来るということをやったわけです。

問題は、このマッカーサーの指摘です。これは、私は帝国陸軍の欠陥の本質を見事に突いていると思います。軍隊が精強な戦闘集団たらねばならないというのは当然なわけですけれども、精強な戦闘集団でなければいけないという、その最も肝心な事柄を真剣に追求するという点が、帝国陸軍は希薄だったのではないか。どんな国の軍隊でも、戦場における勇戦敢闘が至上の名誉として評価されない場合、強い軍隊にならないのは分かり切ったことだろうと思います。

ところがどうも帝国陸軍はそういう点で正に異様な軍隊であった。幾つも例はあるのですが、一つだけその象徴的な例を上げますと、ミズリー号上で降伏調印式が行われた日の晩、ある陸軍大佐が遺書を書いて妻子とともに自決するんですが、その遺書の中に、帝国陸軍の人事にまつわる恐るべき弊害を糾弾する文章を書いていました。「人事の一部として誠に恐るべきは第一線に出されることが懲罰であるとされていたということである。罪を犯せば第一線に追いやられるという傾向があったという事である。某高級将校は言うことが聞けないのならニューギニアの第一線に放り出すぞと言って部下を脅かしていた、第一線に行くことが懲罰となるような国軍が弱体化するのは当然のことである」、そういう遺書を書いて彼は自決したのです。正に象徴的な事実だと思わざるを得ません。

軍人の存在理由というのは、とどのつまりは有事の際に第一線で敵兵に殺し殺されるというところにいってしまうわけで、それを覚悟して、それを肝に命じて任務に勤しむ軍人を、列国は名誉ある職掌として重んじているわけですけれども、帝国陸軍の場合、軍人が第一線に行くことが懲罰となるという、軍隊として致命的な欠陥としか思えない、そういうものを抱えていたのです。

テネシー州のチャタヌガという町にアメリカ最高の軍人勲章たる名誉勲章を記念する施設があります。私も行ったことがありますが、名誉勲章を貰った軍人達の写真がずらりと並んでいます。勿論硫黄島戦の軍人達の顔も並んでいます。第二次大戦中、アメリカの最高の軍人勲章の名誉勲章をアメリカ海兵隊は八四個獲得しているのですが、その三分の一は一ヵ月間の硫黄島戦で獲得したものであります。アメリカ兵の戦場における勇戦敢闘ぶりがいかに硫黄島で抜きん出ていたかということでありまして、アメリカ国民がそういう自分達の同胞の勇気を誇りに思ったからこそ、硫黄島メモリアル即ち海兵隊メモリアルがアメリカでもっともよく知られたメモリアルになったのだと、ブラッドレーは書いております。

つまり、第一線に出ていかに殺し殺されるかというそこのところで、誰よりも、他のどの戦場よりも硫黄島において海兵隊が活躍した。それが今日のブッシュであれ、誰であれ、硫黄島、硫黄島の名をしきりに口にするところに繋がってくるんだろうと思います。ところが帝国陸軍では第一線に出されることが懲罰であるとされていた。つまりそれは帝国陸軍が自らの軍隊としての存在理由を否定するがごとき弊風に蝕まれていたということになります。

そういう全うならざる軍隊において、軍中央が第一線について真剣に考える筈はなかった。栗林中将は硫黄島から何回か大本営の作戦指導に対して猛省を促す内容の戦訓を送りつけていますが、大本営はそれに「身を以て体験せられたる戦訓は時々刻々全軍に普及して将来戦に資しつつあり」という返電を打っています。しかし中将の批判を真剣に受け止め検討した形跡は全く無い。続く沖縄戦においてもまったく同じ問題が起こったにも関わらず、大本

営の反応は旧態依然たるものであった。「将来戦に資しつつあり」というのは、官僚的な紋切り型でしかなかったということであります。

近代的なプロシャの陸軍を確立したモルトケは「そう思われるよりはそうであるべく常に努めよ」と参謀達に常々言っていたといいます。階級が高いとか、きらびやかな軍服なんかを着て威張っていることよりも、軍人としての存在理由の自覚というものがいかに大事か、何の為に軍人であるのか、その「である」ということを常に考えよと、軍人の存在理由というのは何なのか常に考えよと、モルトケは言っていたというのです。しかし、軍人であるべく常に努める為には、軍人であるというのはどういうことかが明確に自覚されていなければなりません。有事の際に第一線で殺し殺されるところに最大の存在理由があるということが自覚されていなければいけないわけですが、帝国陸軍はその自覚が欠如していた。故に滅ぶべくして滅びたのではないかと私は思います。

以前ちょっと評判になった本で『失敗の本質』という本があります。副題が「日本軍の失敗から何を学ぶか」というのですが、その序章にこんな事が書いてあります。「平時において日本軍の組織はほぼ有効に機能していた。しかし危機、すなわち軍隊が本来の任務を果たすべき状況で日本軍は有効に機能しえず、さまざまな組織的欠陥を露呈した」。軍隊が本来の任務を果たすべき状況である危機において数々の組織的欠陥を露呈したというのですから、帝国陸軍というのは何とも不思議な「軍隊」だったということにならざるを得ません。

本来の任務の何たるかをさっぱり理解していない集団であるならば、本来の任務を果たすべき状況に立ち至っても組織が有効に機能し得る筈は無い訳です。

陸軍の弱点は日本文化の弱点

ただ、何度も申し上げますが、私は帝国陸軍だけが責められる問題ではなく、陸軍の弱点は日本文化の弱点だと思っています。その点は戦前も戦後も何も変わっていないだろうと思います。つまり危機というものを、国家の最悪の事態というものを我々の文化は真剣に考えないのです。

帝国陸軍の元情報将校がある本の中で書いている事ですが、アメリカが太平洋における対日戦を予測した時期というのは大正一〇年頃で、爾来アメリカは開戦準備を進めるが、他方日本軍はその後真珠湾まで実に二四年間惰眠を貪っていたそうであります。

治にいて乱を忘れることが最もあってはならない筈の軍隊が、こういう状態だったということは、我々日本国民全体の弱点を象徴的に表しているんだろうと思います。

この間、イラク戦争の最中にロンドン・タイムズが、イラク戦が終わった後、こんどはワシントン・タイムズが、つまり英米の新聞がいずれも日本の国防政策について「いつまでタブーに囚われてあんな時代遅れの平和主義を墨守しているのか」という主旨の論説を掲載していました。ブッシュ政権に近いと言われるワシントン・タイムズは、はっきりと改憲を主張していました。これが英米の常識だろうと思います。この類のことはすでに三〇年位前から、アメリカの真っ当な知日派の知識人が言っていたことです。

ところがテポドンが飛んでくるとか、北鮮のミサイルの問題が出てくるとか、そういうことにでもならない限り、日本は何もしなかった。マッカーサーが晩年、日本のジャーナリストに、あの憲法をまだ守っているのかと言って驚いたという記事を、どこかで読んだことがありますけれども、マッカーサーが驚くような状況がずっと続いてきた。つまり戦後半世紀以上の間日本人は国防を真面目に考えることはなかったわけで、戦前も戦後も惰眠を貪っていた点では何ひとつ変わっていない。

ですから、帝国陸軍だけが弱点を持っているのではなくて、最悪の事態というものについて真剣に考えない日本文化の弱点について、真剣に考えないことにはどうにもならないと私は思っています。

一方、栗林中将というのは軍人としての本来の任務について非常に強い自覚を持った軍人であります。彼は陸士、陸大をトップクラスで卒業し、賜の軍刀を貰っていますが、そういうエリート将校ならほとんど政治に関わりを持つわけですが、全然関与していません。ですから栗林中将について書く時に非常に困ったのは、いわゆる政治的に活動した将校については色々な資料が残っているわけですが、栗林については何も無い。それだけ彼は、軍人は政治に関わらずということを愚直に守り続けた軍人だったということになります。

ですから彼の陸士同期生というのは二十六期で、田中隆吉なんかもそうですけれども、軍閥抗争史上に名前を残した軍人が多いのですが、栗林中将の名前は全然出てきません。そういう彼の一面をよく示す若き日の論文をここでご紹介したいと思います。これは私が早稲田の図書館で埃を被っているのを見つけたものです。ご参考までに申し上げますと、早稲田の図書館には結構陸軍のものが残っているのです。ボロボロになっていますけれど、焼けなかったらしく割合残っています。私も偕行社とか色々なところでお世話になりましたけれども、結局早稲田の図書館で見つけた資料が殆どです。

それは「国民思潮の推移と軍隊精神

教育について」という論文で、「吾人将校の覚悟」という副題がついてます。栗林が中尉の頃に書いたものです。彼は言います。大正デモクラシーの影響を受けて兵隊がだんだん新しい知識を身につけるようになり、デモクラシーとか、自由主義思想が段々氾濫しつつあるこの時代に、そういう風潮にいたずらに反発して弾圧を叫んでも仕方がない。それよりはむしろ兵隊に対して将校たるものは、軍人としてのしっかりした立脚点を示してやり、確固たる自覚を促すことが大事なのに、今の将校の「軍事以外の知識の著しく低級なるは争うべからざる事実である」。そういう有様でこの時代に兵隊の教育ができるか。兵隊に自覚を促すことが出来るか。そういうことを栗林中尉は言いまして、続けて、

「斯ノ如キ状況ニ於テ將校獨リ自覺セス、社會ニ於テハ高等有識ノ職族ナリト自稱シ單ニ嚴シキ軍服ヲ纏ヒ態度ヲ莊重ニシタルノミニシテ、（これはさっきのモルトケの言葉を思わせるような文章ですけれども）唯機械的ニ曰ク軍紀、曰ク秩序、曰ク服從ト教ヘタリトテ今日ノ時勢ニ適スルモノニアラス。茲ニ議論ヲ挾ムモノアリ、曰ク多忙ナル吾人ハ典範例ノ研究スラ十分ナル能ハサルニ何ソ他ノ方面ニ時間ヲ割クヲ得ンヤト。

是レ所謂暇ナシトシテ文讀マヌ哉ノ類ノミ。苟モ其必要ナルヲ察知セハ、四六時中何時ニテモ機會ハ得ラルルニアラスヤ。聞ク所ニ依レハ、獨逸將校ハ戰爭前少尉九年中尉六年即チ中隊長タルマテ任官後十五年ヲ要スルモノアリ、而シテ此間彼等ハ實ニ主トシテ軍事以外法制、經濟、倫理、心理、教育、宗教等有ラユル一般常識ノ習得に耽リツツアリト。彼等社會ノ上流ニ位シ其眞價ヲ發揮スヘキヤ知ルヘキナリ。」

栗林中将は陸士、陸大をトップクラスで出ていると先程申しましたけれど、少佐になるまでに十五年以上かけていて、同期と比べても遅いんです。これは何故なのだろうか。決定的な証拠を持っているわけではないのですが、それでもこういう文章を書いていた栗林と昇進の遅さというのはどこかで繋がっているのではなかろうかという感じが私にはするのです。

いずれにせよ、時代の風潮に流されるでもなく、またいたずらに反発するでもなく、冷静に現状を直視した上で将校の自覚を強く促すというふうな書き方ですね。

また、この論文には、今や日露戦争の時とは兵隊の意識も変化したのであって、そういう現実を直視した上でそれに応じた将校としての自覚を持たなければいけないという文章もあります。

「將校ノ督勵ヲ待タスシテ精神的ニ服行シタル純朴着實ナル下士卒ハ既往ノ語リ草ニシテ、現時及將來ノ軍隊ニハ遂ニ看出スルコト能ハサルヘシ。從テ吾人ハ今ヤ一擧手一投足率先躬行以テ活模範ヲ垂レ彼等ヲ指導サセルヘカラサルニ至レリ。然ルニ吾人ハ往々ニシテ彼等ニ對シ強要シ督勵スル事柄ニシテ自身之ヲ履行セサルコトナキニアラス。己ノ爲ササル所ヲ以テ彼等ニ強フ、今日以後ノ下士卒ハ果シテ能ク服行スルヤ否ヤ。壮丁ノ知識ハ日ニ月ニ進ミ公私ニ於ケル將校ノ一擧一動ヲ常ニ批評眼ヲ以テ觀察シ、軍隊ハ壓制ナリ己ノ爲ササル所ヲ人ニ強フ、又軍紀服從ヲ教フルハ壓制ヲ發揮スヘキ手段ナラスヤトノ念ヲ抱クニ至ルヘシ。此ノ如キハ現時ノ趨勢ニ於テ又已ムヲ得サル現象ニシテ其罪固ヨリ下士卒ニアリト雖モ、而モ將校タルモノ深ク自ラ省ミスシテ可ナランヤ。」

栗林中将は硫黄島戦の最後の突撃の時、戦闘帽を被って地下足袋履き、白たすきを十文字に掛け軍刀を振りかざし部下の先頭に立って進んだと言われています。すぐに撃たれて死にますが、一緒に総攻撃に参加していた大山という生き残った軍曹は、その日日没と共に栗林中将は高らかに詩を吟じ、残存兵力約四百を自ら率いて突撃、右大腿部に重傷を負って尚も前進中に出血多量で絶命したと言っています。

通常将軍というのは突撃に参加しないわけです。後ろにいて腹を切る。部下の前で走る姿を見せることも無いと聞きましたけれども、栗林は自ら先頭に立って総突撃を指揮したわけです。中尉時代の将校の覚悟を最後の最後まで持続したのだろうと思います。

アメリカの合理精神の論理の絲

最後に、勝つべくして勝ったアメリカの合理精神の論理の絲ということについて申し上げます。

栗林中将の相手は、アメリカ海兵隊の司令官ホーランド・スミスという中将ですが、この人は日本軍の抵抗が終わった後、戦闘を全てやめさせて、一日かけて栗林中将の遺体を探させたといいます。ところが栗林中将は敵に死体を見せるのは武人として最大の不名誉である、自分の死体を絶対に敵の手に渡すなと部下に命じてスコップを持たせて走らせた。ですから栗林中将の死体は地下深く埋められて今に至るも発見されておりません。

そういうライバルにスミスは敬意を表したわけですが、この人も非常に興味深い人物で、硫黄島攻略戦に彼を起用したのはルーズベルト大統領その人だったと言われておりますから、野戦の指揮官としても相当力のあった人だろうと思います。彼は『珊瑚礁と将官達』という有名な回想録を書いてまして、これは大変おもしろい。軍人の回想